

『連続講座』一九六〇年代 未来へつづく思想』

(吉川勇一 原田正純 最首悟 山口幸夫
高草木光一編集/岩波書店/2625円)

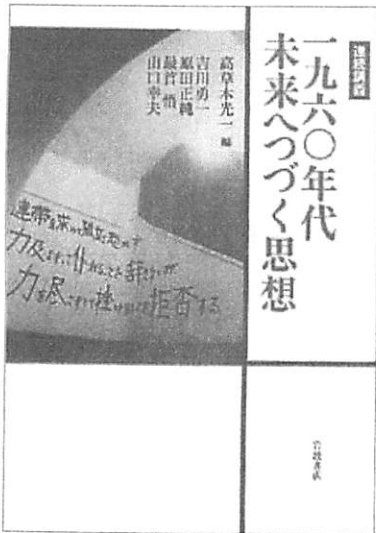
石田 雄

る私に元気を与えてくれる文章でした。

現在の私にできることは毎月1回地域の憲法学習会、教会の九条の会、そして自宅の読書会ぐらいのことですが、軍隊経験者が絶滅危惧種となっている今日、軍隊経験も生かして、安保武力による抑止を徹底的に問う本を出したいと、書く体力はないので話した内容を専門のライターにまともしてもらおうという方式を進めているところですので、その意味でもいろいろ教えられることが多くありました。

このたびは吉川さんの『原水爆禁止運動からベ平連へ』という論文を収録した『一九六〇年代 未来へつづく思想』を贈って頂いて本当にありがとうございます。早速、息もつかずに読み通しました。これまで長年にわたって吉川さんたちの運動の周辺にあり続け、今年88歳になり、自宅から2kmぐらしか活動範囲がなくなっているながら、それでも「生命とくらし」を中心とした視点から、何とか平和・反戦のための行動を続けたいと思ってい

一九六〇年代 未来へつづく思想



第一に、それぞれの時代の「くらし」がみごとに描かれているのが印象的でした。戦後食べ物のない時、特別の意味を持ったマーガリン、胸のポケットが右にある裏返された背広、60年当時のお父さんの貴重な一杯のビールを反戦活動後は「キリンビール断ち」する話し等々。こうした日常生活へのまなざしこそは、くらしに根ざした運動の基礎なのだと感じました。このような描写のうまさ、単に話し方の技術の問題ではなく、運動が生活する人間によって支えられていることを示すという点で感服しました。

第二に、このようなまなざしの上に展開されたこれまでの運動組織論の再検討という点でも、私の図式的理解に反省を迫る具体性に

教えられることが多かったと思います。原水禁運動当時の「筋輪論争」(編注1)、60年代の「ベ平連トンネル説」(編注2)などをめぐるとろどろとした当時の動きは、人間と組織の関係を具体的に思い起こさせてくれます。

とりわけ重要だと思ったのは、そのような混沌の中で見出されたベ平連の「共同行動の新形式」行動目標が一致する限りで協力し、意見の違いを認め、他人の行動に介入せず、お互いに中傷しない」についてで、これはベ平連の貴重な遺産として今日でも参考にすべきものだと感じました。

最後に、終わりの部分で、砂川での非暴力直接行動に感動して先住民運動をはじめたデニス・バンクス氏との砂川闘争以後約半世紀を経た後の出会いの事例は、結論として長期的展望の必要性を強調された点とともに、読者に希望と自信を持って活動を続けるための手がかりを与えるものとして、今後大いに利用させていただきたいと思えます。

以上、とりあえずの読書感です。くれぐれも健康に留意され、いつまでも元気に発言を続けてください。

(いしだ・たけし、政治学者、本会会員)

(編注1) 筋を通して「反安保」まで踏み込むべきか、国民参加の幅を重視した平和運動に限定すべきかという、当時の原水禁運動における政治路線論争

(編注2) ベ平連は、いわゆる日和見左翼を新左翼に鍛え上げるためのトンネルだ、との揶揄を込めた中傷



